

海外生活 エッセー

シドニー事務所

宿泊できないホテルとパブの文化

(一財)自治体国際化協会シドニー事務所 所長補佐 田淵 亮介 (愛媛県派遣)

シドニーの街を歩いていると、「～ホテル」と書かれた看板をよく見かけます。赴任当初は、「こんなに宿泊施設が多いなんて、さすがシドニーだな」と驚いたことを覚えています。しかし、中をのぞいてみると、受付も客室もなく、そこにあるのはビールサーバーと陽気な笑い声が飛び交う賑やかな空間だけ。実はオーストラリアでは、「ホテル」という名を持つパブが街のあちこちに存在するのです。

➔ パブ文化とホテルの由来

そもそも、パブとは「パブリック・ハウス」を短くした言葉で、地域の人々が集う社交場として発展してきました。ランチタイムにはステーキやフィッシュ&チップスを楽しむ人々にぎわい、店内の大型モニターではスポーツ観戦に熱中する姿も見られます。お酒を飲む人だけでなく、老若男女が気軽に集う公共空間といった雰囲気があります。また、19世紀から営業を続ける店もあり、シドニー最古級の「ロードネルソンホテル」をはじめとする歴史あるパブは、今では多くの人々が訪れる観光スポットにもなっています。



1841年から営業する「ロードネルソンホテル」

さて、この「ホテル」という名称は、シドニーのあるニューサウスウェールズ州の酒類規制の歴史と関係していると言われています。かつて同州では、パブは午後6

時に閉店する決まりがあり、急いで飲む人々の姿は「シックス・オクロック・スウィル」(=6時のがぶ飲み)と呼ばれました。当時、午後6時以降も酒類を提供するには、宿泊施設を備えることが条件とされていたため、パブが「ホテル」として登録し、営業上のメリットを得ようとした時期があり、現在の名称にその名残が見られると考えられています。結果として、シドニーでは宿泊機能のないホテルが数多く存在しているのです。

➔ 名称の裏側から見たもの

オーストラリアの歴史は比較的近代に形づくられたものですが、パブの名称ひとつにも、かつての規制や人々の工夫が静かに刻まれており、この国ならではの文化や歴史を感じることができます。

こちらでの生活を通じ、日常の何気ない風景にも、それを支える背景や物語があるのだという視点を持つようになりましたが、その一方で、日本や故郷である愛媛県については、これまで十分に目を向けてこなかったことにも気づかされました。

帰国後は、この気づきを持ち帰り、これまで見過ごしてきた魅力や価値をあらためて見つめ直し、自らの言葉で故郷を語れるようになりたいと考えています。



現存12天守の1つ松山城 (愛媛県)

参考: Museum of History NSW 『Sydney's Pubs: liquor, larrikins & the law』
<https://mhsw.au/stories/general/sydney-pubs-liquor-larrikins-law/>